

動物の行動学者になろう

ねらい 動物の行動を観察し、不思議に思ったこと、疑問に思ったことを指摘する。結果から学んだこと・発見したことを楽しく発表する。観察した動物の行動の特徴を二つ以上言えるようになる。

時間 1時間

場所 動物が観察できる所

人数 2人

季節 いつでも

用具 筆記用具

手順

□導入

動きのある人の絵、写真などを見せて、何をしているところか、思いついたことを発表してもらう。

●どうしてそう思ったのか、紹介しあう。

●想像しやすいのは、自分と同じ人間のようなすであり、普段からよく観ているからということを話し合う。

●絵（写真）は止まった状態だが、前後関係を知ると、解釈の仕方も変わることを確認する（資料が準備できるとよい）。

□展開

- 1 アリ、野鳥など動きがあって観察しやすい動物を1種類選ぶ（近くの小学校の飼育ケージの動物でもいいし、水槽の魚でもいいし、動物園などに出かけてもよい）。
- 2 あまり観察のテーマを決めてしまわないで、動物の行動の様子を全て記録するようにする。（途中でテーマが見つかったらその観察に絞ってもよい）。
- 3 観察の際に、「個体識別（複数の個体がいって、マーキングしなくても可能な場合）」「特徴的な行動」「不思議に思う行動」などに注目するようにする。
- 4 観察時間は30分～2時間程度（興味や観察のようす、経験度などに応じて決める。参加者自身に決めさせてもよい）。
- 5 記録の合間に、極力スケッチをとるようにする。

□まとめ

●みんなの記録を持ち寄り、紹介しあう。また、その結果についてディスカッションさせてみる。

●行動の観察をしていて気づいたこと、感じたことを紹介しあう（動物の行動だけでなく、観察した自分自身のことも話しあう）。



ポイント

動物の行動の意味については、客観的に結果を導くのは大変難しいことだと認識し、行動の意味を導くまでのプロセスに焦点があたるようにする。また、行動の意味を考えることが楽しいことに参加者が気づくように指導者は気をつけよう。